



全道展交流紙

2017.3

No.53

—新世代の視点—

今後の公募展・ 全道展に向けて思うこと

〔絵画〕宮地 明人＝岩見沢市



私は68回展から70周年記念展までの3年間、庶務部長として事務局にいました。その任期の中で部長を務める以前より全道展に深く関わり、運営側としての幅広い経験をさせてもらいました。その経験を経て、今後の公募展・全道展に向けた思いを書きます。

まず、自分の制作活動や公募展との関わりについて少し触れておきたいと思う。全道展以外の活動では主に個展やグループ展、全国区の公募展の出品などが中心で、そうした活動には当然、費用と時間が掛かってくるのだが、それらの活動を通して得られるものも大きい。作家にとって大切なのはやはり観覧者である。作品の発表を続けると徐々に固定の観覧者が増えてくることはやはり嬉しいし、初めて会う方との話が今後の制作の糧になる。特に個展では観覧者とじっくり話をする時間が魅力で、そうした話の内容に全道展で自分の作品を知り、興味を持って訪れる方が多い。このように周知されている公募展の出品は自分の活動にも大いに役立っている。これは公募展に出品するメリットであり大事な部分だろう。他にも会員、会友、一般出品者まで幅広い年齢層の作家とコミュニケーションをとり情報交換ができる点や公募団体に所属することで、作家としての地盤ができるなどのメリットがある。デメリットでいうと大半は費用の面だろう。平面や立体作品の大作制作になると制作場所や制作費用、運送費の面で負担が大きい。特に遠方地域から出品する場合はもっと負担が増える。

近年の公募団体では出品者減少の問題を抱えており、全国的にどの公募団体もその課題に苦渋している。特に若手作家の出品は伸び悩むところで、その背景としては90年代後半から公募団体に所属する教育機関（特に大

学）の指導者が少なくなったことが大きい。それに加え上記で上げた費用面の負担、今も続く不況の影響による経済的理由が減少の要因だと思う。学生の内は公募展やコンクールなど出品する人もそれなりにいるが、社会に出て職に就くようになるとメインは仕事になり、制作活動を断念する人も多い。また職を求めると首都圏に集中し、地方圏は人口減少と過疎化が進み若者がほとんどいない現状だ。

そういった時代背景は急には変えられないが、例えば道内の各地域と連携し、美術に特化した地域活性化に繋がる事業を企画するなど、少しずつでも何か打開に繋がる活動をしていく必要性を感じている。また、昨今の美術教育環境では美術に触れる時間が徐々に縮小されている。子ども達が身近に美術に触れる機会を作っていかなければ美術を志す者も減少するだろう。このことも美術に関心を持ってもらえるような講演やレクチャーを教育機関と連携して公募団体が企画する時代に来ているのではないだろうか。全道展では7地域中、4地域の地区展が定期的に行われているが、その各地区展の協力も必要だろう。

学生を対象とした「学生美術全道展」の出品者数も減少傾向だが、近年の作品を見ると中には本展に出品しても通用するような有望な作家も見受けられる。将来的には是非本展に出品して活躍してもらいたい。会員は審査をするだけでなく、優れた作家の活躍の幅が広がるように作家を育てたいと切に思っている。今後も全道展はそういった若手作家を受け入れる大きな器を持った作家集団であり続けたい。

第 20 回記念全道展十勝地区展報告

十勝地区会 代表 齊藤 隆博

昨年は神田日勝記念美術館で十勝地区会 20 周年の大きな足跡を残すことが出来ました。館内には地区会員 27 名の総数 42 点の作品が展示され、静謐な美術館の空間に淡い明かりに浮かぶ作品群は静かに息づいて輝きを見せていました。心の琴線に触れ思わず体が震える覚えでした。平成 28 年 11 月 8 日～13 日迄、時の流れを画布に刻み続けた神田日勝ゆかりの地で 20 周年を迎えることが出来て深い絆を感じます。開幕に先立ちロビーでは鹿追町長、帯広道新支社長、道立帯広美術館長、神田日勝記念美術館長、鹿追教育長などの御来賓の出席を得て盛大にセレモニーを開催できました。全道展からお祝いと、川本事務局長の代理で元事務局長の渡辺貞之会員のご祝辞も華を添えて戴き厚くお礼申し上げます。初入選の 5 名は札幌に次いで 2 番目という快挙でした。おかげ様で厳しい寒さでしたが好天に恵まれこの時期としては珍しく鹿追の地に 400 名近い来場者がありました。遠くは愛媛県や東京都、大阪市、佐賀県、埼玉県からの来館者があり、さすが日勝記念美術館だと思いました。さて今年は第 21 回の全道展十勝地区展を帯広市民ギャラリーで 8 月 3 日～8 日迄開催致します。さらに気分を一新して作品制作に励み十勝地区会をスタートさせたいと思っております。最後になりましたが地区展の発展と進化の記念の年にご支援戴いた全道展始め鹿追町や関係機関の皆様にご感謝とお礼を申し上げ報告と致します。



鹿追町長を始め、関係機関の皆さんと



2016 全道展道東地区展を終えて

釧路地区会事務局 森川ヒロシ（文責）



8 月に入り釧路ではめずらしくむし暑い日が続いている。それでも季節は巡りホザキシモツケは色あせはじめ、セイタカアワダチソウが道路沿いに咲き始めた。

さて、各地の地区展や作家展開催の知らせが届く中、今年も幣舞橋を眼下に釧路港を一望することができる釧路市生涯学習センターの 1 階市民展示ホールを会場に 8 月 10 日(木)から 8 月 14 日(日)までの 5 日間、道東も他地区に遅れることなく地区展を開催することができた。

今回展では、根室から初めての全道美術協会賞がでた。受賞者の宇佐美さんは全道展に出品し始めて 4 年目の快挙。勿論画歴はながく春国岱の自然を描き続けてきた。柏崎さんの奨励賞とともに二人の受賞に根室が沸いた。私たち釧路・根室をはじめとする道東の仲間たちの大きな喜びとなった。工芸・田中さんの会友推薦、絵画・加藤さんの 2 年連続奨励賞、彫刻・石橋さんの佳作賞など地元新聞社にも大きく取り上げられ、多くの方々に地区展開催の周知がはかられた。そのかいあって、5 日間の観覧者は 1340 人に達し、入場者数の新記録となった。また、特記すべきは今年初めての祝日となった 11 日、山の日。川本事務局長が奥様とともに来館され、一つ一つの作品を丁寧に観てくださり沢山のアドバイスをいただくことができた。私たちは多くの励ましの言葉に沢山の勇気をいただいた。

「作家にとって安易とあきらめは最も恐れなければならないこと。」私自身がいただいた言葉である。この言葉を忘れることなく、仲間とともに力を合わせ道東の感性を発信し続けていきたい。

今回、会場の様子であるが会員、会友、並びに入選作品展示の他、絵画の方々に小品展示もお願いし、ダイナミックな作品と心とませる小品が並び調和と迫力のある会場になった。観覧者からも「会場全体から迫力とすごさを感じる。小品も良いですね。」との声をいただいた。

これからも全道展とともにありながら、それぞれの制作スタイルを尊重しつつ互いに刺激し合い、それぞれが自分らしい作品を形にできるよう頑張っていきたい。



2016 年 全道展室蘭地区から

室蘭地区事務局 矢元 政行



全道展室蘭地区作家展(室蘭市民美術館前で搬入時集合写真)

今回の全道展 71 回展では、室蘭地区から新会友に池田正子さんが推薦され、佳作賞に中澤文隆さん、奨励賞に神原利樹さんと中野美砂子さんが受賞、初入選に佐々木善子さんと室蘭地区の出品作家にとって大きな飛躍の年となりました。

本展終了後の 7 月 8 日(金)には、恒例の受賞者と初入選者の祝賀会と出品者の交流懇親会が、市内の居酒屋で 20 名の参加者を得て行われました。佐藤光雄会員のユーモア溢れる司会進行で始まり、受賞者から喜びのスピーチ、参加者全員から作品制作の意図や思い、悩み、次回に向けての抱負など、中身の濃い充実した時間を過ごすことができました。

さて、昨年度は室蘭市民美術館の改修のため開催できなかった全道展の室蘭地区作家展ですが、今年度、平成 28 年 8 月 17 日(水)から 21 日(日)まで 5 日間の会期で開催することができました。室蘭地区は、全道展移動展がなくなると同時に 10 年間ぐらい全道展の作家による展覧会が途絶えていましたが、この地区の活性化や出品者との交流を目的に地区作家展を開催することになり今回で 5 回目となりました。来館者 311 名で、最終日の 8 月 21 日(日)には、矢元政行、山田一夫会員によるギャラリートークも行いました。一般の方も含めて約 20 名ほどが集まったギャラリートークでは、参加された出品者が自身の制作意図を話し、それを受けて二人の会員が絵に対してコメントしたり、質問や意見なども出したりして、フリートーキングの形で約 1 時間にわたり行いました。



会員・会友・出品者による懇親会

室蘭地区の課題は一杯ありますが、これは全道展の課題でもあり、すべての公募展について言える問題でもあります。

個々の作家が自身の作品に向き合ってベストの作品を創ることが最も重要だと考えます。

全道展 第 18 回函館地区展報告

2017 年 1 月 24 日(火)～1 月 30 日(月)

函館市芸術ホールギャラリー

函館地区会事務局 安井 孝(文責)

厳寒の 1 月、第 18 回函館地区展が始まりました。

今回の出品数は 44 点。第 71 回全道展では高齢や健康上の理由で退会された会友、そして長い間、出品を続けてきて常連入選者のベテランが何人も制作を断念するなど出品者の減少が目立ちました。前回展より 5 点程少ない数となり、地区展としては大変残念な状況にあります。

新年の初仕事は 1 年後の会場を確保することから始まります。

1 月 4 日に来年 1 月のギャラリー使用申し込みの手続きがあり、無事、第 19 回函館地区展は 2018 年(平成 30 年)1 月 23 日(火)～1 月 29 日(月)函館市芸術ホールギャラリーと決定しました。

会の運営は事務局が中心となり、会員 10 人程からなる会務委員で業務を分担して進めています。会務委員会は年に一回程度。総会は展覧会初日展示作業終了後、出品者全員が参加して開かれます。毎回、次回展に向け建設的な意見交換が行われています。会期中には懇親会もあり今回は 22 人が参加する予定です。毎回、楽しく交流が深められています。

第 71 回全道展での道南の受賞者は寺岡弘子さんの新会友のみでしたので、72 回展に向け一層、意欲的に作品制作に取り組むよう気持ちを高め合う機会になればと思っています。

ここ数年の入場者は横ばいです。来場者の高齢化も目立ちます。今回展は何とか会場が来場者で賑わうよう、会期中の好天と入場者増を願っております。



総会風景



会場の函館市 芸術ホールギャラリー

作家探訪～「馬場雅己」～

一瞬のきらめきを閉じこめる、ガラス制作

取材：〔工芸〕新関 千裕＝小樽市



右がサンドブラストの機械。
左はガラスを削る旋盤

小樽の山間にある朝里川温泉に、一軒のガラス工房が佇む。大の温泉好きという馬場さん。15年前に工房を開きました。三角屋根の可愛い建物が販売スペースも備えたアトリエです。

大雪となった12月の中旬、雪かきに追われる馬場さんの姿がありました。

工房に入ると、1300度で休みなく炊き続けられる『電気ガラス溶解炉』、作業中すぐに冷めてしまうガラスを熱する『焼き戻し窯』、作った作品をゆっくり冷ますための『徐冷炉』がコンパクトに設置されています。

そのほかにはガラスを削る旋盤やサンドブラストの機械も。硝子の原料は「珪砂」が主な成分。工芸用に調合されたバッチと呼ばれる原料を、一晩、炉のるつぼで溶かすと翌朝には柔らかいガラスとなります。溶かすガラスは透明。ガラスに色付けするのは「色ガラス」。様々な粒子の色を組み合わせで自分のオリジナルの色を作り出していきます。

冬場、室内は炉の熱で暖房も要らないほど。少し作業を始めると、体が汗ばんできます。そして過酷なのは夏場。工房の中は40度を越えます。ガラス製作はこの熱さと、瞬時に冷めて硬くなる硝子を扱う時間との戦いで、忍耐・集中力を一瞬たりとも欠かせないのです。

『どんな作業もまず、竿と呼ばれる鉄のパイプにドロドロに溶けたガラス生地を巻き取る場所から始める。硝子生地は非常に柔らかく巻き取る作業ひとつとっても熟練の技が必要なのです』と語ります。

作業は一定のリズムで小気味よく進められていきます。これは20年という職人歴と、何事にも『ちゃんとやりたい』（これは本当に口癖のようにいつも言っています）を信条とする作家の姿が映し出されているといつも思います。



いろいろな設備が整った工房内部

その時に訪れた土地からインスピレーションを受けてガラスに表現し作品を制作しているという馬場さん。今取り組んでいる作品を見せてもらおうと、確かに、昨年訪問したという京都の色彩を強く感じます。旅先で感じた感動を自分なりに、消化し作品に仕上げていっているようです。

前作から取り組んでいる技法があるそうで、詳しく教えていただきました。ガラスの特性を生かし、色を何層にも重ねる。表面をサンドブラスト、リューターで削り出し、地の色を出していく。そうすることで色の深みを出しているのだそう。新たに漆を用いた沈金・金押しの技法にも挑戦しているという。

最近では台湾の新築のビルに作品を納入するなど活躍の場を広げています。

アトリエにはいつもJAZZやBLUESが流れ、趣味のギターも大切に展示されています。作品作りに取り組むのに音楽は欠かせないエッセンスになっていると感じます。

今後は、他のさまざまな工芸の技法を取り入れてガラス作品を作っていきたいと抱負を語って頂きました。

今回、お話を伺って、馬場さんの制作への真摯な姿勢を改めて感じる事ができて、とても良い機会となりました。

第19回 私のあの日あの時

全道展 初挑戦の記

〔絵画〕 杉吉 篤=札幌市



初入選作「壊れた時間」(1983年)

高校生のころ朝食をとっていると、テレビのニュースで全道展の協会賞の作品が、わりとじっくり映されてました。本城義雄さんの作品でした。そのころの私は、滝川高校美術部の先輩である、佐々木治さんの経営する喫茶店によく行ってました。そしてそこで、神田日勝の画集を初めて見て衝撃を受けました。そんな青春時代を過ごした私は、21歳の時札幌に出て来てラーメン店で働きながら、6畳一間のアパートでちまちまと小さな絵を描いていました。翌年の10月に2回目の個展も終わって、ほっとしてギャラリーに行きますと、そろそろ大作を描いて、公募展に出した方がいいという話になりました。私は全道展に出したいと言いましたら、ギャラリーで知り合った先輩に、君の絵は全道展では、むずかしいかも知れないと言われました。それでも全道展に挑戦したいと言いましたら、「それなら全道展は6月だから、5月に個展をやった方がいい。俺5月に予約してるから、替わってやるよ。」と言ってくれました。今思えば、あまり関係ないと思いますが、当時は「よし！やるぞー」と盛り上がりました。そして半年で100号2点と小品数点を仕上げて、なんとか個展も終わり、その勢いで全道展初挑戦となりました。結果発表の日、朝早く目が覚めた私はコンビニへ朝刊を買いに行き、どきどきしながら新聞を開きました。そして入選の所の小さな文字の中に自分の名前があった時は、本当に嬉しかったです。そしてここから始まったと思います。あれから30年以上たった今でも、何を描きたいのか、これでいいのか？と行ったり来たり毎日の毎日です。

懸命だったあの頃

〔彫刻〕 伊藤 寿朗=札幌市



昭和42年、懐かしい一枚

この写真は、私が、教育大学岩見沢校に入学した昭和42年の夏に、旭岳の麓(勇駒別)に写生旅行に行った時の写真です。

総勢30人。いわゆる夏合宿です。左前から大塚哲郎先生、ベレー帽は砂田友治先生、その右は彫塑科の先輩で徳田幸次郎さん、原完さん。中央で帽子を被り足を伸ばして態度の大きいのが私。向かって右に大沼先輩、同期の阿部俊夫くん・糸田良子さん・御法川昭子さん。撮影者は峯田敏郎先生です。何故か大先輩の広瀬さんや瀬尾さんは最後尾です。今、数え年70になり、先輩たちを懐かしく思い出します。「もう半世紀も前なんだなー」と、少し物悲しい気分にもなります。前途洋々、大いに夢を持ち、不安を持ちながらも、懸命に学ぶ、いい時でした。

もう一度戻れるとしたらこの場所がいいと思います。

初めて油絵具セットを購入し、30号のキャンバスに旭岳を描きました。夕食が終わると部屋の壁に絵を立てかけて合評会です。我々1年生8人もまだ研究室が決まっていなくて、何を専門にするのかを考え、真剣でした。

小・中・高の教師を目指しながらも、前年に安田侃さんが芸大大学院彫塑科船越保武教室に進んだ事もあり、プロを目指すような意識は高まっていました。

砂田先生の指導も厳しい中にも温かさのあふれるものでした。中でも、日常の何気ない身近なもの、例えば「石炭ストーブや石炭箱、石炭も優れた絵の素材である。」との話は、今も強く頭に残っています。それから、彫塑科に所属し、卒業し、教師になり、全道展の会員にもなりましたが、泥臭い仕事に地道に取り組む姿勢は、この夏の日がベースになっているのだと思います。

全道展俯瞰図

小樽市展創立の頃

— 思い出すままに —



〔絵画〕
山下 脩馬 = 小樽市



小樽運河にて

小樽市美術展覧会（市展）の70周年記念展が2016年秋に開催された。第1回展は1947年の開催で、終戦から2年目の事だった。

今、この頃の事を知っている人も、語る人も少なくなっているが、私の知っている事を述べてみたい。

(1) 殴られていた兵隊— 9歳の私の記憶

1945年の春、戦局は厳しくなり、小樽水天宮神社の境内にも高射砲が設置され、境内は材木で囲われて民間人立入禁止となった。近くの広場で高射砲関係の兵隊の訓練が行われていて、それに立会った事がある。測距器を使って弾丸の到着距離を測る訓練で、間違っただけで兵隊は激しく殴られた。蚊にさされた位の反応で、すぐにやり直しをして再び間違っただけで兵隊は更に激しく殴られていた。

軍隊はあまり良い組織でない事と、「三角函数」くらいは頭に入れていないと殴られる羽目になる事がある、と痛感させられた。

(2) 田辺三重松の大作— 行方不明の作品

夏の海水浴は小樽駅から車で蘭島海岸まで出掛けていた。その頃、小樽駅舎の海側の入口の化粧ガラスが据えつけられた壁に、田辺三重松の若い頃の大作100号4点が横並びに掲示されていた。停泊する大きな船と、走りまわる小さな発動機船が伸び伸びと描かれていた。1946年の夏にも見かけた気がするが翌年の夏には無くなっていた。最近、小樽駅事務所に訊ねてみたところ、財産台帳には確かに存在が示されているが、実物はかなり前から見つけれないでいる、との事だった。

あの物不足の時代だ。国鉄の労使関係の軋轢も背景にあったのか、誰かが勝手に大作を引きずり下ろし裁断して仲間と分けたのではないか（あくまで私の推測ではあるが）、いや、そうではなくて、どこかの倉庫に仕舞われていて、ある日突然、公になる…。そんな事を期待しているが70年も不明のままなので望みは薄い。

(3) 写生に励む画家達

戦争が終わり、小樽のどこをテーマにして描いても自

由となって、市内のあちこちでキャンパスを立てて写生に励む人が多くなった。小樽運河と倉庫を描いていた若い頃の大和屋巖の姿が忘れられない。ゴザを敷き、座った姿で全紙倍判の水彩画を描いていたが、周りには何のリクレーションもない人達が、山になって先生の見事な筆さばきに感嘆していた。

中村善策がワイシャツをたくし上げた姿で、キャンパスを抱えて花園公園内を歩き回っていたのも忘れられない。

(4) 市展の出発— 紆余曲折のなかで

小樽では1945年12月に小樽勤労文化会が発足し、美術部に国松登、大月源二などが参加し、これが小樽美術協会となり、1947年に第1回小樽美術協会展が開催された。しかし、協会の運営について、政党の下部組織にしようとする人と、政党とは関係を持つべきでないという人とで争いになり第2回展は開催されなかった。この状況を見て、当時の小樽市長が乗り出し、小樽市主催の小樽市美術展覧会（公募）を開催する事とし、審査員には先の協会展のメンバーを中心に、市長が委嘱するという形を取った。そして1947年秋に丸井デパートを会場に改めて第1回展が開催された。この時の審査員で全道展関係者は国松登、小島真佐吉、鈴木伝、千葉七郎、森本三郎であった。その後、河野薫、藤本俊子、一原有徳、新覚吉郎、羽山雅倫、山下等が委嘱されている。確か、1回展で国松登が「病める太陽」という作品を発表していたのを覚えている。

なお、美術協会は第1回展開催だけで解散したが、20数年後の1969年に再結成され、以後毎年開催、市展と両立している。メンバーはかなり重複しているのが実情だ。

市展の初期の頃は、手堅い写実が中心であったが、その後、サロンド・メの影響が目立つようになり、以後、アンフォルメル旋風、アメリカ現代美術等の影響を受けた作品が出てくるようになる。

これからどうなるのか。作家個々の永遠の課題なのだろうか。初期のヒューマニティに溢れた作品と、多くの作家が懐かしく思い出される。
(敬称略)

ART STAGE

—作家の痕跡—

岩見沢市絵画ホール・松島正幸記念館企画展

「砂田友治展」～生誕 100 年を記念して～を観て

〔絵画〕梅津

薫＝岩見沢市



表題の記念展は 2016 年 7 月 23 日から 8 月 22 日にかけて開催された。これに先駆けて同年 4 月 29 日から 6 月 26 日にかけて苫小牧市美術博物館で「生誕 100 年記念砂田友治展」が大々的に開催され、好評を博したが、岩見沢展はギャラリー空間の制約もあり 200 号や 150 号の大作はないが魅力的な展示となった。

100 号の大作 7 点を含む 27 点の作品は、会場に入るなり砂田色が見る者を包みこむ。これまで何度も見てきたギャラリーがまるで別物空間となって息づいている。ギャラリーの一角には、現在もそのままというアトリエの写真パネル、パレットや筆、スケッチ・ブック(コピー)の数々が展示され、同ホールの創意と意欲が表れていた。

会場の始まりは最晩年「自画像」F 15 号(1995 年作 注 1999 没)。オレンジやセルリアン・ブルー、カドミウム・グリーン・ベール、白、グレーからなり、画面全体から光を発するような明るさで見ると魅了する。「人と牛」(北海道教育大学岩見沢校所蔵)F 100 はイエロー・オーカーを基調として牛と人をシルエットの塊としてとらえ、迫力がある。大作の中でもちょっと異色なのが「船と男」で剛直な作品が多い中でこの作品はとても流麗な筆致と豊富な色調、線のハーモニーが心地よい。第 2 室の小品群も確かな感性と目線でどれも魅力的。特に「大通り公園」F 8 号や「高架橋から見たポプラ」F 8 はその感性、筆力にとっても心惹かれた。

最後に、スケッチブック(コピーで苫小牧市博物館のご協

力)は砂田先生の制作の秘密を垣間見ることのできる貴重な展示。

風景スケッチには、「コケモモ、ハイマツ、エゾイソツツジ(ツツジ科)スズシロのようなかわいい花」など名称と印象を書き込み、雄大な連山のスケッチでは全ての峰(岳)の名を記入して緻密で繊細な性格も垣間見ることができた。

私は同企画展の案内チラシにルオーの影響について触れたが、教育大学岩見沢校教職時代の同僚である工芸の大塚哲郎氏(現、北海道教育大学名誉教授)は、当時を振り返り、研究室に行くと「君、ルオーだよ、ルオー」と熱く語っていた、と側聞した。

同展を一緒にみた全道展絵画会員田崎謙一氏曰く。

「どの絵も^{すき}隙が無い。ちゃんと描いている。小さな作品も厳しい。」

また、最晩年の「太陽とレール」については「本当にこのように見えたのかもしれない」と、つぶやいたのが今でも強く心に響いている。

私は同企画展の案内チラシにこうも書いていた。

「子供心をその中心に据え、そのまま同心円的に作家としての感覚や技術を広げていったように思われる」

最晩年はそれこそ無心に描いていたんだろう、とあらためて思ったのであった。私もつくづくかくありたいと……。

2017年 第72回全道展 —可能性に挑む—

部 門◆絵画、版画、彫刻、工芸
会 期◆2017年6月14日(水)～6月25日(日)
札幌市民ギャラリー（中央区南2東6）
10：00～18：00（最終日16：30）
19日(月) 休館
入場料金◆当日券 800円 前売券 600円
23歳以下・障がい者無料

- ◆出品料 3点まで8000円、1点追加ごとに1000円
23歳以下の出品料半額
(1994年4月2日以降に生まれた方)
- ◆搬入 6月6日(火)、7日(水)10時～17時
賞 全道美術協会賞・北海道新聞社賞・八木賞・佳作賞・奨励賞

※6月17日(土)ギャラリートーク・作品講評会・表彰式・懇親会があります。多数のご参加を歓迎します。
詳細は出品要領などの資料でご確認願います。

全道美術協会

検索

<http://www.zendouten.jp>

第58回学生美術全道展

—期待の若い星たち—

2016年10月8日～11日開催

学生美術全道展は、4部門(絵画、版画、彫刻、工芸)に応募総数246点があり、入賞、入選作は217点であった。全体的に優れた作品が多く、全道美術協会賞の木村麻衣さん(岩教大4年生)の作品も鋭い感性が光り、高い評価を得た。会期中の9日は表彰式に続き恒例のミニ講座が開かれ、渡会純价会員が「版画について」と題し近年増えつつある新しい技法や、スクリーンを使用している作品説明を行った。

なお、道新掲載の審査委員長総評は今回から受賞作品個々への寸評に変わり、審査委員長を務めた會田千夏会員の的確な感想が良く伝わり、好評であった。



受賞作の並ぶ会場

第6回 新鋭展

新しい環境で有意義に

2016年11月22日～27日開催

第71回全道展の入賞者と会友、新会友の作品28点を展示した展覧会がギャラリー大通美術館で開かれた。

ワンフロアに全ての作品を並べられ一望できるため出品者にはもちろん、鑑賞者にも好評であった。

22日に行われたオープニングパーティも盛況で、出品者同士や出席者との交流の輪が広がり、和やかな雰囲気の中出品者は自己紹介を兼ね、自作の解説を行った。また来場者数も約1100名と、例年を大幅に上回った。道新掲載記事や大通公園が近く、人通りが多いことなどが良い結果に繋がったものと思われる。



少し緊張して作品を紹介

● 編集後記 ●

昨年うちに寄稿の依頼をしていた方々から、ポツリポツリと原稿が届き出す。1月から2月にかけて編集作業、3月号の発行となる。全道展の仲間、一人一人にとって今年はどんな年になるのだろうか。自分自身の潜在能力の発掘、開拓に遠慮はない。6月の本展に向け、自分の歩み方前に！

(本間弘子、米澤洋子(文責))